

日本と朝鮮 李垠を通して描く



『講評』田久保忠衛・国基研副理事長
全4巻の大作だが、既刊2巻についての書評を、という変形の仕事を選考委員会から依頼された。完成を待つていろいろなくなる理由はよく分かる。著者は李垠の生い立ちから日本の陸軍幼年学校留学までの様子を詳細に追っていく。取材に

要した時間と労力がいかに大変であったか。李王朝の祭祀などの詳細きわまる描写ひとつ取つてもよく分かる。文章で包んでいるのは李垠への愛情だろう。李垠の生涯を「数奇な運命」という5文字で片付けるにはあまりにも魅力が多すぎ

1969年東京都品川区生まれ。中央大学卒業。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程満期退学。県立広島大学准教授などを経て、2010年9月から現職。『日韓ナショナリズムの解体—「複数のアイデンティティ」を生きる思想』(筑摩書房)、『松田優作と七人の作家たち「探偵物語」のミステリ』(弦書房)など著書多数。

大韓帝国最後の皇太子、李垠。わずか10歳で留学名目で来日、日韓併合後は皇族に準ずる待遇を受け、大日本帝国陸軍の幹部にもなった。だが、終戦後はその身分を失つただけでなく、時代の暗部として遠ざかられる一方、韓国側からは「親日派」とみられ、双方の歴史のはざまに埋もれてきた。

日本では、李垠よりも、皇族の梨本富家から嫁いだ妻・方子妃のほうが「流転の王女」として知られる。寡黙だった李垠が自身のことをほどんど語らずに世を去つたことも、その生涯についてあまり知られていない要因となっている。

比較文化を専門とする著者の李建志氏は、受賞作『李氏朝鮮最後の王李垠』(作品社)で、日本と朝鮮を中心とした文化交流・摩擦を描くという大きなテーマについて、李垠の物語を通じて語るという壮大な作業に挑んだ。本書は4巻構成で執筆が進められ、現在までに第1、2巻が刊行されている。

1巻は10歳まで、2巻は日本に来てからの日々を中心に15歳までと、主に幼少期の姿が明らかにされるが、日記類の資料が駆使され、時代を生きているかのような感覚が味

わえる。特に著者が関心を持った、王子としてのさまざまな儀式(人生儀礼)については詳細に描き出されており、日本の皇室をイメージしながら当時の文化の類似や違いを知ることができる。

今年中に予定される、大正、昭和期を描いた3、4巻の刊行が待たれています。

評伝書き継ぐ意義

『受賞の言葉』文化研究者である私にとって、最も知りたかったのは李垠の人としての生活の記録でした。彼に関する「日記」類を読み込むことで見えてくるさまざまな物語など、静かではあっても相当に驚きと発見のあるものでした。私が書いたものは、小説家が書いたようなドラマではなく、淡淡とした日常を読むことで見えてくるさまざまな物語など、静かではあっても相当に驚きと発見のあるものでした。私が書いたものは、小説家が書いたようなドラマではなく、淡淡とした日常を読むことで見えてくる政治」や「国際関係」、そして李氏朝鮮の王妃や官吏たちが繰り広げた「絵巻」とでもいうべきものです。

今回の受賞で、李垠の評伝をこれからもあと2冊書き継ぐという仕事の意義を改めて自覚し、より厳しい読者からのご鞭撻をいただくことで成長しなければならないという覚悟をする次第です。

忘れられた内モンゴル特務



『講評』高池勝彦・国基研副理事長
著者は、わが国と内モンゴルとの関係から、満州事変は日露戦争の延長戦であるともいえる、という。本書は中華人民共和国(旧ソ連)、それから日本など大国に挟まれて翻弄され、ついに自分たちの国を持つことができない

迫害されている内モンゴルの歴史の一端を語っている。著者は、日本がこの内モンゴルとかつて深い関係にあったことを忘れないでほしい、という。タイトルにある「草はらに葬られた記憶」という言葉には、肅然たらざるを得ない。

1974年内モンゴル自治区生まれ。95年シリンゴル盟蒙古師範学校卒業。教員として勤務後に来日し、2011年関西学院大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。教育学博士。関西を中心に外部講師として国際理解や多文化共生、外国籍児童生徒の問題や母語教育にも携わる。17年に『「ヌホの白い馬」の真実—モンゴル・中国・日本それぞれの姿』(風響社)で第41回日本児童文学学会奨励賞を受賞。

学んだ大叔父は今でも大地を「草はら」と呼ぶ。「日本には内モンゴル人を中国人にした責任があるのではないか」と著者は問いかける。草はらには日本人が忘れてはならない歴史が埋もれている。

『受賞の言葉』日本が内モンゴルに関与した歴史の重みに比して、今日、多くのことが忘却されており、それがモンゴル人からすれば非常に寂しいことになります。だから、私はあえてこのテーマを選びました。評価されたことを大変うれしく思っています。

拙著は、日本・ソ連・中国といった大国に翻弄され、そのまま生きるモンゴルの逸史(正史に書かれていません)でもあります。日本との直接または間接的な関わりによって生まれた逸史こそが、日本近代史の一側面であると認識しています。一人でも多くの日本人にこの史実を知ってほしいと願っています。

フリーランスライター
ミンガド・ボラグ氏

『受賞の言葉』日本が内モンゴルに関与した歴史の重みに比して、今日、多くのことが忘却されており、それがモンゴル人からすれば非常に寂しいことになります。だから、私はあえてこのテーマを選びました。評価されたことを大変うれしく思っています。

拙著は、日本・ソ連・中国といった大国に翻弄され、そのまま生きるモンゴルの逸史(正史に書かれていません)でもあります。日本との直接または間接的な関わりによって生まれた逸史こそが、日本近代史の一側面であると認識しています。一人でも多くの日本人にこの史実を知ってほしいと願っています。

第7回「国基研 日本研究賞」に2氏



副理事長
田久保忠衛

最高賞の日本研究賞には、韓国の経済学者で李承晚学堂校長の李榮蕙氏が選ばれたが、本人から辞退の申し出があつた。日本研究特別賞には韓国籍(東京都品川区出身)で関西学院大学社会学部教授の李建志氏、日本研究奨励賞には内モ

ンゴルから来日したフリー・ランスライターザミンガド・ボラグ氏がそれぞれ選ばれた。

櫻井理事長は李榮蕙氏について「経済学の専門家にふさわしく、イデオロギーにとらわれず数字を基に論じるフェアな姿勢が素晴らしい」と評価したが、韓国人の事情もあり辞退となつた。田久保忠衛理事長は李建志氏について「研究と描写の緻密さに敬服した。普遍的な人ととの関係が行間からあふれ出ている」

同賞は、国基研の活動に賛同する寺田眞理氏の寄付を元に平成26年に創設。対象となるのは、日本に帰化した1世を含む外国人で政治、経済、安全保障、社会、歴史、文化の各分野で日本への理解を増進する優れた研究を表彰する。近年に刊行、発表された日本語または英語による作品から選ばれる。

「取材力と描写の緻密さに敬服」

14日授賞式

と論評、ミンガド・ボラグ氏には「日本人から見ても文章がうまく、取材力も高い。今後、大きな仕事を成し遂けるのである」と語った。

なお、授賞式は14日に行われる。

■選考委員会

櫻井よしこ・国家基本問題研究所理事長(委員長)
田久保忠衛・国基研副理事長、杏林大学名誉教授(副委員長)
伊藤隆・東京大学名誉教授
平川祐弘・東京大学名誉教授
渡辺利夫・拓殖大学学事顧問
高池勝彦・国基研副理事長、弁護士